

日本の「ケルト」受容に関する一考察

- 「エンヤ」以後の音楽を中心に

高松 晃子

はじめに

日本において、「ケルト」という言葉に対する認知度は、近年、かなりの勢いで高まってきたように見える。ここ15年ほどの印象では、ヨーロッパの文学や美術、音楽などの専門家に限らず、ごく一般の人々までがこの言葉に反応するようになってきた。それ以前の状況を考えると、普及率の高さと浸透の早さには驚くべきものがある。

今や、「おしゃれ」な響きさえもつようになったこの「ケルト」とは、元来、古代ヨーロッパの民族の名称である。紀元前2世紀頃、ケルト民族は、ヨーロッパの中部と西部一帯、イタリア北部、ヨーロッパ南東部、さらにはイベリア半島にまでひろがっており、文字通りヨーロッパの一大勢力であった。その後、彼らのほとんどが、ローマ帝国に吸収されたり、ゲルマン民族に同化、あるいは撤退を余儀なくされたりしたが、ヨーロッパの西端まで退き、そこで生活を続けた者もあった。現在では彼らの子孫が、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、フランスのブルターニュ地方、スペインのバスクやガリシア地方などに暮らしている。

1980年代前半まで、「ケルト」は一般の日本人にとってほとんど未知の領域であった。それまでは、美術研究家や、イエイツやジョイス、ラフカディオ・ハーンら、アイルランドの伝統をふまえた作家を研究する文学者ら、古代ケルト文化に直接関わろうとする、ごく限られた専門家の間で用いられてきた語にすぎなかった。筆者は1983年頃からスコットランドをはじめとする英国音楽に取り組むようになったが、1986年より前に「ケルト」という言葉を、文献でなく実際に耳にしたことは、おそらくごくまれにしかなかったと記憶する。筆者が思い出す限り、研究者の間で「ケルト」という枠組を用いることはそれほどなく、音楽愛好仲間の間でも、アイルランドのセッション、イングランドのパラッド、スコットランドのダンス・ミュージックなどという言い方はしても、「ケルトのなにになに」という表現は聞いたことがなかった。おそらくそれにはふたつの理由がある。ひとつには、「ケルト」とはあくまでも古代の民族であり、現在の子孫たちが行っている芸術文化その他の活動は、彼らがいかに「ケルト系」であっても、古代とのつながりをことさらに強調する必然性がなかったこと、そしてもうひとつの理由は、アイルランドやスコ

ットランド、ウェールズ、ブルターニュの音楽には、ひと括りにできない多様性と固有の歴史があることである。

「ケルト」に関する予備知識がほとんど普及していなかった日本で、それが受容される最初のきっかけとなったのは、1987年にNHKテレビで放映されたドキュメンタリー番組「幻の民・ケルト人」であろう。その中で流れたアイルランドの女性歌手エンヤの歌声が新鮮だったこともあり、このころ「ケルト」は言葉としての市民権を獲得した。やがて、CDショップに「ケルト音楽」というコーナーができ、「癒し系」という言葉と「ケルト音楽」が結び付き、アイルランドのダンスグループであるリバーダンスの公演は大盛況であり、ケルトの展覧会は18万人を集め、ケルト人気はすっかり定着した感がある。

ところが、筆者は日本におけるこの「ケルト」呼称やそのブームに対しては、ずっと違和感を持ち続けてきた。なぜなら、スコットランドでは、住民たちの間に、自分たちが「ケルト人」であるという認識がほとんどなく、スコットランド人としてのアイデンティティが強調されるばかりだったからである。日本でケルトがもてはやされると、ますますこの違和感は増大し、いつかその理由を解き明かす必要があると考えていた。

本稿では、1980年代から今日に至るまでの日本における「ケルト」受容の流れを概観し、そこでどのようなことが問題になるか、特に音楽文化を中心に考えていきたい。まず、第一節では、「ケルト」受容のプロセスを3つの時期に分け、それぞれの時期に起こった出来事を振り返る。第二節では、「ケルト音楽」なるジャンルが創出されたプロセスを検証し、さらに、「ケルト」のブランド化に加えて、「癒しの音楽」と「ケルト音楽」を結びつけることが、いくばくかの危険性をはらんでいる点を指摘する。なお、本稿で「ケルト」に言及するときは、主としてブリテン島とアイルランドのケルト系住民について論じるものとする。

第一節 日本における「ケルト」受容の流れ - 1980年代から今日まで

まず、日本における「ケルト」受容の大筋を振り返ってみることにしよう。ここでは、NHKが「幻の民・ケルト人」を放送した1987年までを第Ⅰ期、1987年から映画「タイタニック」公開、リバーダンス来日直前の1998年までを第Ⅱ期、「タイタニック」が公開され、リバーダンスが来日した1998年から今日までを第Ⅲ期とする。

1. 第Ⅰ期 1987年まで

(1) 「神秘のケルト」イメージの萌芽 - 妖精・ミステリアス・ファンタジー・魔法

1980年代前半の日本においては、一般的な認識として、アイルランド、スコットランド、ウェールズは、ややもするとイングランドの陰に隠れがちであり、辺境、秘境、田舎、といった負の評価が付きまとっていた。加えて、アイルランドは、IRAによるテロ活動がしばしば報道されたことから、近づき難い危険な地域であるかのような印象も免れなかった。スコットランドについては、タータンのキルトを身にまとった男性がバグパイプを吹くという画一的なイメージに

とどまり、ウェールズにいたっては、ステレオタイプなイメージすら形成されていなかった。1980年代のイングランドが、社会的・経済的には大変困難な状況にあったにもかかわらず、紳士の国、優雅なお茶会、伝統と革新の共存、といったキーワードに彩られ、尊敬とあこがれのまなざしを向けられていたのとは大きな違いである。日本人は明治時代以来、あるいはそれ以前から、英国を崇拝する傾向があったが、それはもっぱらイングランドに対してであった。

前にも触れたように、1987年のエンヤ登場までの間、日本において「ケルト」という文脈で論じられてきたのは、文学・美術・宗教が主であった。文学においては、妖精や超自然的素材を用いた神話や民話の翻訳、研究が行われ、ラフカディオ・ハーンやイエイツの研究もその延長線上にあった。また、トールキンやサトクリフによるファンタジーや児童文学の紹介も積極的に行われてきた。ケルト美術は、渦巻きや縄編み文様を特徴とし、紀元800年頃に編纂された福音書である『ケルズの書』をはじめとする写本、ケルト十字架、レリーフなどの研究などが行われてきた。いまひとつ重要なのは、土着宗教であったドルイド教の研究である。彼らの思想に顕著に表れる、太陽崇拜、アミニズム、自然への畏敬の念、などをキーワードに、ストーンサークルなどの古代遺跡の読み解きも行われた。これらは文字通りケルトの遺産をひもとく研究であり、「ケルト」の名を冠するにふさわしい、というかそれ以外の呼称は使用不可能な領域である。ただ、「ケルト」なる語は、ごく一部の研究者や専門家の中で使用された特殊な用語だったとしても、ハーン、イエイツ、妖精、ファンタジー、魔法、といった記号は、一般にはアイルランドという国と分かちがたく記憶されてきたのは確かであり、「ケルト」という呼称が普及した後も、これらはイメージづくりに重要な役割を果たすことになる。

(2) 「ケルト」ブランド以前の音楽 - 《埴生の宿》・トラッド・プロテストソングのU2

すでに述べたように、エンヤ登場以前に、音楽的文脈において「ケルト」という言葉を耳にした記憶はほとんどない。アイルランドやスコットランドに限らず、英国やヨーロッパの伝統的な音楽や、伝統に基づいた音楽は、日本では「トラッド」あるいは「フォーク」と呼ばれ、当時から一部の熱心な愛好家の間では大変人気があった。ステイーライ・スパン、フェアポート・コンヴェンション、ディック・ゴーハン、チーフテンズ、クラナドなどは、1980年代前半までにすでに（一部で）よく知られたトラッド演奏家あるいはバンドである。ファンから見て彼らはあくまでも「トラッドの演奏家」であり、前二者がイングランド、ゴーハンはスコットランド、チーフテンズやクラナドはアイルランドの出であるという認識はあったが、後三者をまとめて「ケルト」と呼ぶことはなかった。

トラッド・ファンでなければ、アイルランドの音楽といえば、《埴生の宿》《ダニー・ボーイ》のような教科書的「古典」を連想するか、ヴァン・モリスンあるいはU2のような、ロック系の音楽に行き着くかであっただろう。80年代のU2のレパトリーは、プロテスト・ソングが多かったので、IRAがらみの血なまぐさいアイルランドのイメージが増幅されやすかった。ブームタウン・ラッツ、スティッフ・リトル・フィンガーズらも、社会的なメッセージ性を強く打ち出

した活動を展開した。1980年代は、ロック界ではいわゆる「プリティッシュ・インヴェイジョン」の最中だったので、オレンジ・ジュース、アズテック・カメラ、ロイド・コール&コモーションズ、ストロベリー・スイッチブレイドなど、スコットランドもヒットチャートで活躍するミュージシャンやバンドを数多く輩出していたが、それらが古代を強く連想させる「ケルト」という文脈で論じられることはなかったはずである。

2. 第Ⅱ期 1987年から1998年まで

(1) 最初のケルト・ブーム - 正統的理解

前にも述べたように、「ケルト」という言葉を広く日本に紹介することになったのは、イギリスBBC放送が1986年に制作したドキュメンタリー番組シリーズ、*The Celts* であり、そのすべての音楽を担当したアイルランドの女性歌手、エンヤであったことは疑いがなからう。この番組は、ケルト人の発生から今日までの歴史をたどったもので、「幻の民 ケルト人」というタイトルで翌87年、日本でもNHKによって放映された。続いて、番組中の音楽を集めたCD「ケルツ」が発売された。オーバーダビングによって幾重にも重ねられた彼女の歌声は、電氣的に処理された無機的な音楽が流行していた当時としては実に新鮮で、日本のみならず本国アイルランドや英国、ヨーロッパ、アメリカでも、大きな人気を博した。大きなセールスを記録した次作の「ウォーターマーク」以降、サウンドそのものはアイルランドの伝統の主流でないにも関わらず、エンヤ、イコール「ケルト」という図式が定着した。その後はアイルランドやスコットランド出自のアコースティック・サウンドはとりあえずケルトと呼ばれるようになったが、実体のないものを強引にケルトと呼んでいるような印象ではあった。

さて、音楽における「ケルト」ジャンル成立と相前後する形で、『ケルト/装飾的思考』(鶴岡：1986)に代表される鶴岡真弓のケルト美術研究が注目されたこと、井村君江の著作に見られるような、神話・妖精関連の出版(たとえば井村：1987, 1988など)がいくつか続いたこと、さらに、歴史をふまえた総合的な概説書(たとえばパウエル：1990)が現れたことなどで、「ケルト」の間口が広がった。この時期に出版されたものには、「ケルト」の名を冠したものが非常に多い。

『ケルトの残照』(堀：1991)、『ケルトの風に吹かれて』(辻井・鶴岡：1994)、『ミステリアス・ケルト』(シャーキー：1992)、『ケルト・伝統と民俗の想像力』(中央大学人文科学研究会：1991)、『ケルトの探求』(レイヤード：1994)などなど、1987年から1998年までに出版された著作物で、タイトルに「ケルト」とあるものは、少なくとも40冊以上は存在する。タイトルになくてもケルトを扱っているものは、相当数あると思われる。

ただ、この時期の前半は、事実上エンヤが単独で牽引するという不自然な展開をしていた音楽を除けば、ケルトとはすなわち一部ヨーロッパの先住民という、真実でありニュートラルな認識からはずれることなく、地道な研究が着実に発表された時代であった。その流れにおいて、1990年の時点でまだ、「ケルト」はヨーロッパの、あるいは英国の「過去」であり「辺境」であった。象徴的なのは、1990年に日英政府が協力して日本で行われた英国紹介イベント、UK90であろう。

そこでは、「ケルト」という言葉が出てこないのはもちろん、北アイルランドやウェールズ、スコットランドの紹介記事やイベントが不当に少なく、イングランド中心の伝統的な英国受容の様子がうかがえる。この、あくまでも周縁としての「まじめな」ケルト・ブームは、1991年の雑誌『ユリイカ』3月号の「特集・ケルト」あたりを機に、いったん落ち着きを見せる。

(2) 2度目のケルト・ブーム - 「癒し」

別の形でケルト・ブームが再燃するのは、1995年頃である。同年11月11日付の朝日新聞には、「ケルト文化の再評価進む 自然・異界へのあこがれ」という見出しで、映画、音楽などを紹介しながら、日本文化とケルト文化に共通の素地があることを論じた記事が掲載されている。じわじわとケルトという言葉が再浮上する過程で、その前年ごろから「癒し」が時代のキーワードとなり、音楽界においては「癒しの音楽」というジャンルが生まれた。

1980年代のいわゆるヒーリング・ミュージックと、近年の「癒し系」音楽の違いは、前者が波あるいはf分の1ゆらぎといった科学的根拠を提示して、医学的にその効果を歌っていたのに対し、後者はそれがなくなり、あらゆるものが含まれ得る巨大なあいまい領域になったことである。1980年代のバブル全盛期は、某CMの有名なコピー、「24時間働けますか？」が象徴するように、列島は活気づき、癒されたいと口に出すことははばかれるような時代であったが、本当に癒しを必要とした人たちは、いかにも効きそうな科学的ヒーリングCDに手を出したのである。ところが、90年代を迎えて不況が始まると、誰もが癒される必要性を感じるようになった。それどころか、癒されるべきだという、一種の強迫観念すら漂うようになった。80年代には少数だった癒され人口が、10年後には爆発的に増えたわけである。すると、ヒーリング・ミュージックは「患者」の治療目的の科学性を捨てると同時に、患者気分の健康体を甘やかす「癒し系音楽」と名前を変え、単に心身に心地よい、耳あたりのよいものへと変化した。用いられる音楽も、鳥のさえずりや波の音のような自然音に、人工的なシンセ・サウンドをミックスしたようなつくりから、音源のジャンルを拡大するようになった。そこでは、手あかの付いた西洋音楽からはやや距離をおいてはいるが、新奇すぎないサウンドが求められた。その流れで注目されたのが、グレゴリオ聖歌であり、中国の二胡音楽であり、「ケルト」だったのである⁽¹⁾。実体不明のジャンルだった「ケルト」にとっては、好都合の現象であった。

1995年以降の新聞記事や雑誌、CDの宣伝文句などを見てみると、「ケルト」が「癒し」または「ヒーリング」と結びついて語られているのが目につく。たとえば、1996年3月7日付け朝日新聞の夕刊では、「アイルランド音楽 郷愁おびたポップスが人気」という見出しでアイルランドのアーティストが何組か紹介されている。その書き出しの部分はこうになっている。

アイルランドの伝統音楽に基づいたポップスが静かな人気を呼んでいる。郷愁を帯びた独特のメロディーは、殺伐とした時代に、一種の精神的ヒーリング（いやし）の音楽として受け止められ、アイルランドを含むケルト文化への注目の高まりも背景に、新旧様々な

アーティストが紹介されている (朝日新聞 1996年3月7日夕刊)

1987年にケルトの女王として登場したエンヤが、今度は癒しの女王として再び注目を集め出したこのころ、「ケルト」音楽とはアイルランドやスコットランド音楽であれば何でもよいという枠組みを狭めて、「ケルト」の看板を背負っていた彼女の音楽、つまりアコースティックな癒しサウンドこそがケルト音楽であるという図式が強固になった。アイルランドのバンド、アルタンが1996年に発表したアルバムは、日本でこのように紹介されている。「アイルランドの風にそよぐ清廉なケルト・サウンド。それは心のうるおいを失った私たちのためのヒーリング・ミュージック (東芝EMIがリリースしたアルタン「ブラックウォーター」広告の文言)。また、エンヤの姉モイヤ・ブレナンのソロ4作目のアルバム「ウィスパー・トゥ・ザ・ワイルド・ウォーター (1999年発売) は、「『癒し系』音楽が注目されている昨今、聴く者を安らぎへと導きます」という宣伝文句を伴って発売された。このモイヤ・ブレナンを含む多数のアイルランド演奏家を擁するピクチャーエンタテインメントのホームページには、「ケルトって?」というページがあり、そこでは『飽和状態のファッション化』にさらされた現代人の心に、なんともいえない癒し感を与えてくれるのだ。(<http://jvcmusic.co.jp/worldmusic/europa/celt/what.html>) とあるから、「ケルト」と「癒し」をセットにした商業戦略は明らかである。

この「癒し」を起爆剤にした第二次ケルト・ブームに乗り、1996年には、在日アイルランド人が中心になって東京都板橋区で第一回ケルト・フェスティバルが開催された。このときはまだ、アイルランドの人たちが手弁当でこしらえた手作りミュージック・セッションという体裁で、目立った広報活動もなかったが、そのわりには、60人ほどが定員の会場にはとても入りきれないほどの聴衆を集めた。このイベントは、現在も年に一度、大田区の東京流通センターに会場を移して行われている。また、1996年に東京の大丸デパートで開催された「妖精展」は、4万人を動員し、妖精人気が衰えないことを証明した。さらに、1998年4月から7月の2ヶ月半にわたって、東京都美術館で開催された「ケルトの至宝展」には、18万人が入場した。

「ケルト」が一種のブランドになったのはこの時期であろう。もともとあった、「神秘的ケルト」イメージに、特別な力を持つ「癒しのケルト」が加わり、超越的なケルト像ができあがった。ただ、ケルトとは古代の民族の名称であり、現在ではその末裔がいるものの、ほとんど実体もなければ本人たちの実感もない。きわめて存在感の薄いものに大きな力を託すという、不思議な現象が始まった。また、ケルトに内包された地域性・多様性については不問に付すという傾向は、現在も続いている。

3. 第Ⅲ期 1998年以降

(1) タイタニックとりバーダンス - 元気の出るケルト

1998年は、日本の「ケルト」受容が大きな転機を迎えた年であった。まず、その年の秋に映画「タイタニック」が公開された。この中に、豪華客船タイタニック号の三等船室の乗客たちが、

地下のパブで、音楽に合わせてダンスをしているシーンがあった。それは、イリアン・パイプ、フィドル、パウロン、スプーン³⁾などを用いてアイルランドの伝統的なダンス曲が演奏され、主人公の2人がアイルランド風のタップ・ダンスを楽しむという展開で、ごく自然で無理のない設定であった。それがアイルランドのものであることは、必ずしもすぐに認識された訳ではなかったが、ちょうど映画公開に続く形で、1999年3月、アイルランドのダンス・エンターテインメント・グループ「リバーダンス」が初来日した。リバーダンスの広報活動は、テレビを通じて大規模に展開されたので、『タイタニック』で見た元気のよいダンスは実はアイルランドのもので、今度はもっとすごい人たちが来るらしいという情報を、一般にまで浸透させるきっかけとなった。しかも、リバーダンス公演の内容は、第一部が古代の神話や伝説をモチーフにしたかなり「ケルト色」の強いものであるため、ここでも「ケルト」の音楽、「ケルト」のダンスというとらえ方に傾きがちであった。

ただ、リバーダンスのパフォーマンスは、アイルランドの音楽やダンスを下敷きにしてはいるが、大幅にアレンジされたエンターテインメント性の強いもので、『タイタニック』で見たような、従来のアイルランド音楽・ダンスからはかなりかけ離れていることに注意しなければならない。リバーダンスの宣伝をきっかけにアイルランドあるいはケルトを知った場合は、既にそれが創出されたケルトであることに気づくべきだった。しかし実際は、「タイタニック」と時期が近かったためにその余裕もなく、リバーダンスの、「元気で力強いケルト」イメージは、タイタニック号のパブで行われていたセッションのイメージを抱き込む形で、強く印象づけられた。

大規模な宣伝活動が奏功して、1999年のリバーダンス公演は、東京・大阪全16回で5万5千人を動員、翌2000年には早くも再来日し、29公演で14万人を動員した。2003年には3度目の来日が予定されており、予想される観客動員数は22万人ということである。彼らの成功により、アイリッシュ・バンドの来日やCDリリース、日本人によるアイルランド音楽活動がいっそう盛んになったことは否定できないだろう。

(2) まとめ - 3つのケルト

さて、1987年のエンヤ登場前から98年のケルト展、そして現在までの日本におけるケルト受容のあり方を概観してみたが、その間、一般的なレベルでの「ケルト」の意味が少しずつ変わってきたことがわかる。ケルトは3つの流れに分岐したのである。ひとつは、妖精や魔法使い、ファンタジーの流れをくむ「神祕のケルト」、2つ目は、エンヤからヒーリング・ミュージック路線にある「癒しのケルト」、そして3つ目に、ダンス・ミュージックのドライブ感が強調される「元気の出るケルト」である。

「神祕のケルト」とは、イエイツの一連の妖精物語に代表される、伝統的な魔法・妖精イメージがあったところに、日本における井村ほかによる妖精物語研究、あるいは古代ケルトの神話・伝説研究やドルイド教の紹介、そして、スコットランドの城が舞台と言われているファンタジー小説、「ハリー・ポッター」シリーズ(ローリング：1999 2000 2001 2002)の大ヒットなどが

続くものである。日本では2002年に公開された映画『ロード・オブ・ザ・リング』(トルキン原作)の音楽を2曲、エンヤが提供したことなども、この傾向に含まれる。テレビの旅行番組やクイズ番組では、ミステリー・サークルや現代の「魔女」などがしばしば紹介され、ミステリアスなケルトというイメージが強調された。「ケルト占い」なるものもあるらしい(美月:2001)。

「癒しのケルト」イメージも根強い。古代ケルトのドルイド教徒が使用したというハーモニーボールを始め、ケルト十字その他の文様をあしらった商品が、ヒーリング・グッズとして販売されている。また、「癒し系」音楽の需要は減るどころか近年いよいよその勢いを増しているようである。CDショップの「ヒーリング」セクションに「ケルト」コーナーがあるのは当たり前のようになっている。

そして「元気の出るケルト」が健在であることは、今年リバーダンスの来日が予定されていることから明らかである。また、日本人アイリッシュ・バンドの活動も盛んで、東京・四ツ谷や京都のように、日本におけるアイルランド音楽発信地として認識されつつあるスポットも現れている⁽³⁾。

第二節 ジャンルとしての「ケルト音楽」とその問題点

「ケルト音楽」が、アメリカを始め全世界にその存在をアピールすることができたのは、それがひとつの「ジャンル」になったからである。ここでは、従来、アイリッシュ・フォーク、スコティッシュ・トラディショナル、バグパイプ・ミュージックなどと呼ばれていたそれぞれの音楽が、「ケルト」のジャンルの中に人為的にひと括りにされるようになったプロセスを振り返り、そこで問題になる点をいくつか指摘する。

1. ジャンル化の戦略

(1) 目新しい名前を付ける

音楽にとって、ジャンル分けはそれほど重要ではないというのが筆者の持論である。にもかかわらずそれをするのは、もっぱらCDを売るためである。「ワールドミュージック」という怪しげなジャンルも、もとはと言えば、イギリスのグローブスタイルというレーベルが、自分たちのレコードを店においてもらうためにこしらえたものである。

たいがい、ジャンルの名前は聞いただけでは理解できない複雑さを特色とする。「プログレッシブ・ロック」、「アシッド・ロック」、「ハウス」、「ミニマル・ミュージック」など、いずれも難解で、熱心な音楽ファンのための専門用語であると言ってよい。しかし逆に、その点が購買意欲をそそる戦略でもある。エンヤが「アイリッシュ・ミュージック」と分類されずに、目新しくよくわからない「ケルト音楽」と名付けられたことは、ある意味で幸運だったとも言える。

日本では、ケルトに関する知識がほとんど広がっていなかったために、全く新しいものとして「ケルト」を受け止めることになった。ケルトと共存し、あるいはルーツとして絶えず意識せざるを得ない状況にあった欧米と比べると、日本には、「ケルト」が、「エンヤ」とともに実に唐

突にやってきたのである。特に音楽の場合、本来「ケルト人」という番組の音楽を作った「エンヤ」と認識すべきところを、「ケルト音楽」の担い手「エンヤ」になった。このとき、「ケルト音楽」という名称が生まれた。このジャンルはまさに名前から先に生まれたのである。

(2) 実体をつくる

実体はエンヤのみであったケルト音楽をジャンルとして成立させるためには、あちこちでケルトという言葉を用いて実体を作らなければならない。1987年以降、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、ブルターニュなどの音楽はケルトの文字をかぶせてプロモートされた。

(3) イメージ作りをする

ジャンルはできたものの、ケルト音楽のイメージはなかなか定まらなかったが、ヒーリングや癒しを求める風潮が思いがけない追い風となった。「癒し系」とは実に便利な言葉である。なぜなら、どんな音楽でも聞く人によっては「癒し系」になり得るからである。そして、この言葉を使えば何でも売れる時代である。何の関係もないと思われる所にまで、「癒し」は行き渡っている。もうひとつのイメージ、「元気が出る」とは、実は「癒し」の同義語で、変換可能な概念である。

(4) 「流行りもの」扱いにする

ケルト音楽が、一時期「ちょっとおしゃれ」なものになった。若者に人気のある日本人ミュージシャンたちが、さかんに「ケルト」と口にするようになったからである。ドリームズ・カム・トゥルーの吉田美和やルナ・シーが、「ケルトに影響を受けた」と発言し、遊佐未森のように実際にアイルランドの演奏家と共演する人も出てきた。遊佐未森のアルバム「honoka」は、アイルランドのバンド、ザ・チーフテンズのパディ・モロニーも参加したもので、インターネットのCDショップでは、次のようなコピーが付けられている。「ほのかに香る『和み系』サウンド・フレバーをどうぞ」。解説には、「長年探し求めていた恋人に巡り会った時、運命の人に会った時、安息の地にたどり着いた時・・・近年の遊佐未森とアイリッシュ・ミュージシャンとのコラボレートやケルト音楽への傾倒は、そんなシチュエーションを思い出させてくれる」とあり（<http://www.du-ub.com/web/magazine/magazine0037/hot.cont.html>）ここでもケルト＝和み系（癒し系）という図式は忘れていない。

装飾品などのグッズが充実したことも、ケルトをヨーロッパの辺境という位置づけから流行りものに導く原動力になった。ハーモニーボールやケルト十字は、ペンダントにして売られている。オンライン・ショップの広告には、「カップルでケルトのものを身につけていると幸せになれるといわれています」とある（<http://www.store-mix.com/ko-bai/product.php?pid=6143&hid=>）。真偽のほどは不明だが、神秘と癒しを結合させた見事な戦略である。アイドルの浜崎あゆみが、ケルト十字のペンダントを付けてテレビ出演しているのを見たことがある。

(5) 泊を付ける

1990年代半ばくらいから、ケルト音楽はロックのルーツとしても注目され始めた。すなわち、

アメリカ音楽はアフリカから持ち込まれたリズムとヨーロッパのメロディー、ハーモニーが融合して発生したとする従来の説に対して、ケルト音楽の影響がむしろ大きかったとする動きが生まれたのである。1986年にP・ファン・ダー・マーヴェが発表した論(マーヴェ:1999)を中村とうようがさらに補強する形で、ロックの起源にケルト音楽を見いだしたのは1996年であった。中村は、アメリカのスカット・ヴォーカルとアイルランドのディドリングとの相関、ブルースとアイリッシュ・ソングの構成の類似性、アイルランドのダンスであるジグが黒人音楽に与えた影響などを指摘しつつ、ケルト音楽がアメリカ大陸で担った大きな役割について論じている(中村1996:44-47)。ここで、ケルト音楽は、単なるヨーロッパ辺境の音楽から、世界を席卷するアメリカ音楽のルーツへと格上げされた。

さらに、2000年という絶好のタイミングで、ビートルズという一種の「神」がケルトと結びついた。このころ、ビートルズのメンバー4人のうち、リンゴ・スターを除く3人までがケルト系であり、ビートルズの音楽にはケルトの影響が見られるという言説が広がり始めた。それを受ける形で、和久井光司がその著作の中で、ロックはアフリカン・アメリカン音楽とケルト音楽の融合から生まれ、その中心的な役割を担ったのがビートルズだった、との説を提示した(和久井:2000)。アメリカ音楽とビートルズという2つの巨大な存在によって泊が付けられたケルトは、その価値について疑問を投げかける余地のない、きわめて「正しい」音楽になったのである⁽⁴⁾。

2. ジャンル化が引き起こす諸問題

(1) ケルトの旗手の非アイリッシュ性

よくある認識は、エンヤはアイルランドの音楽家でありアイルランドはケルトであるというものである。同様に、リバーダンスはアイルランドのダンス・パフォーマンスであり、彼らはケルトであるというのが大方の見方である。しかし、前にも述べたように、リバーダンスのパフォーマンスは、アイリッシュ・ダンスの特徴を引き継いでいるが、ショーあるいはスペクタクルとしての効果を重視した、手の込んだ創作物である。また、エンヤの音楽は、アイルランドの音楽現場のみならず、当時の音楽界全般においても、非常に特殊な存在であったことを忘れてはならない。

ここでは、エンヤの音楽と伝統的なアイルランド音楽の相違点を簡単に指摘しておこう。伝統的なアイルランド音楽のもっとも重要な特徴は、基本的にヘテロフォニックであること、西洋の全音階的音階によらず旋法的であること、細かい装飾音が多用されること、の3つである。ヘテロフォニックとはつまり、音楽が和声の構造に支えられておらず、打楽器をのぞくあらゆるパートが旋律を指向し、それらが時間的・音高的に様々なレベルでの「ずれ」を伴って重ねられていくことを指す。第2の特徴である旋法とは、西洋の音階が長短調に収斂する以前から存在した音組織で、長短調らしからぬ旋律運びをし、機能和声の構造とは相容れないシステムである。つまり、第1の特徴であるヘテロフォニーは、旋法という第2の特徴からくる必然でもある。最後の特徴は、イリアン・パイプなどバグパイプ系の楽器に顕著であるが、旋律の中に、こぶしのような

な装飾音を短い音価で挿入したり、音から音へスライドさせたりすることである。この3つの点から言えるのは、アイルランド音楽は基本的には旋律主体のサウンドであるということである。

翻ってエンヤの音楽を見てみると、彼女のサウンドが、ヴォーカルを重視し、メロディーラインを大切にしている点は、アイルランドの伝統に反するものではない。しかしながらその旋律は、和音にしっかり支えられており、こぶしや曖昧な音の少ない、クリアな輪郭をもっている。(音の切れが曖昧なので惑わされやすいが、それはオーバーダブのためで、旋律自体は単純明快な場合が多い。)また、音数の少ない旋律が多いことから、いっけん旋法的に響くものもあるが、基本的には長短調の中でいくつかの音を抜いた構造であり、旋法独特の節回しが聞けるレパートリーはほとんどない。特に、アイルランド音楽によく見られる、長調の第七音が半音下がる(いわゆる「ブルーの7」)ミクソリディア旋法⁵⁾が目立たないことが、アイルランドらしさを感じさせない原因になっていると思われる。

このように、アイルランド音楽の3つの特徴がことごとく見いだせないのがエンヤの音楽である。もっとも、現在活躍中のアイルランド人演奏家の中にも、ギターやブズーキなどを導入して和音と旋律を両立させている人たちも多い。ただ、そのような和音志向のミュージシャンとも、エンヤは異なっている。大きな違いは音作りの方法にある。彼女の音は、いっけん自然に聞こえるものの、ダビングを繰り返し、シンセサイザーを駆使し、基本的にテクノロジーに依拠した、たいそう作り込んだものである。これは、即興を旨とし虚飾を嫌う、アイルランド音楽の基本的なありかたとは正反対とも言える。

さらに、1980年代後半という打ち込み全盛時代に、生の声(実際には生ではないが)をフィーチャーしたつくりはかなり異質だった。これらの点から、エンヤは伝統的なアイリッシュでもなくポピュラー音楽の流行の担い手でもなく、ひとりの特異なアーティストだったのである。このことから、「ケルト」とは「アイリッシュ」や「スコティッシュ」とイコールではない、ひとつの独立したジャンルを志向していることがわかる。

(2) ケルトの多様性が見えない

エンヤに続いて日本に(改めて)紹介された、きょうだいバンドのクラナドや姉のモイヤ・ブレナン、チーフテンズらは、エンヤとは異なる音作りをしていたとしても、「ケルトのバンド」というフレーズがついてまわった。世界的に見ても特殊な存在に、アイルランドのいわば正統派バンドが吸収された形である。アイルランドの演奏家でありプロデューサーである、ドナル・ラニーは、あらゆる音楽が「ケルト」の名の下に語られることに対して、次のような危惧を抱いている。

アイリッシュ・ミュージックも、今や、あの魔法の言葉、「ケルティック・ミュージック」の一部として認知されている。近頃では、何でも「ケルティック」だ。よくない側面としては、プレスによって音楽ジャンルとしてでっち上げられてしまったこと。いろんな

タイプの音楽が、ひと括りにされてしまったんだ。(中略)ケルティックという言葉が、濫用されているとは、わたしも思っている。アコースティックな音楽であれば、ケルティックのラベルを付ければ何でも売れてしまう。ラベルに商品価値が与えられてしまったんだ(茂木1996:37)。

「ケルト」とひと括りにされたのは、アイルランドの音楽に限らない。スコットランド、ウェールズ、ブルターニュなども同様であった。たとえば、1989年に、キングレコードが「ユーロ・トラッド・コレクション」と称して、ヨーロッパのルーツ・ミュージックをCD化したシリーズを発売した。まだこの時期では、アイルランドやスコットランドのものだけでコレクションを出すわけにはいかなかったということだろうが、その中に、スコットランドの女性ハーブ・デュオ、シリーズの1枚がある。そのCDの宣伝用コメントに、「ケルティックの伝統をふまえながらも、エレクトリック・ハーブを導入するなど意欲的なサウンドを創造。」とある(『季刊ノイズ』1989年冬号広告ページ)。

実際のところ、これら地域の住民は、確かに共通の祖先を持っているかもしれないが、文化的にはかなり異なっている。音楽においてもそうである。しかし、ケルトというジャンルには、多様性を見いだしたり注意深く耳を傾けたりすることを拒むような雰囲気がある。後述するが、おそらくそれは、ケルト音楽が「癒し系」とされているからである。

(3) ケルトの中身はケルトではない

少し前に、ケルトというラベルはアイリッシュあるいはスコティッシュとイコールではなく、独立したなにものかを志向していると述べた。さらに、そのラベルが、内包する多様性を覆い隠している点を指摘したばかりだが、実は、「ケルト」の中身は「ケルト」ですらないという矛盾に満ちた事実がある。本稿の冒頭部分で、スコットランド人は自らをケルトと認識していないと述べたが、アイルランドやウェールズでもおおかたの認識はそうらしい。たとえば、アイルランドの女性シンガー、ドロレス・ケーンも、次のように語っている。

アイルランド人にはケルトについての深い意識はありません。スコットランドとかブルターニュを含めたケルト文化という意識もない。ケルト人というよりもアイルランド人という気持ちの方が先にありますね。ケルトと言った場合には神話的な響きを持ってしまって、いわゆる今の時代に生きているものという認識から遠いんじゃないかしら⁽⁶⁾(山岸1996:43)。

また、ケルトというイメージが先行する状況を危惧して、「ケルト」関係の書籍を複数出版している編集者の寺島誠は、次のように述べている。

あまりにもケルトが氾濫しすぎている。例えば音楽では、ケルト・ミュージックという言葉がある。なんでケルトというかということ、アイリッシュというより聞こえがいいからなんです。自然発生的に始まったケルト文化への関心が、それを利用する人たちによって、一歩進んだところまで来ているようです。（井形1998：81）

寺島が述べたように、確かに「アイリッシュ」というと、従来のイメージ - 誤解を恐れずに言えばそれはすなわちヨーロッパの辺境であり紛争の地 - を引きずっており、どこか政治的で生々しい語感をもつ。それを「ケルト」と言い換え、ロマンティックな過去を想起することで、現実逃避が可能になる。しかしそれは、ドロレス・ケーンのコメントにもあるように、当事者の認識からは遠いものである。

「ケルト」という言葉で多様性を覆い隠し、当事者のアイデンティティに背を向け、耳あたりのよい、郷愁に満ちたサウンドを提供する。この方法は、アメリカにおけるケルト受容と幾分似たところがある。ただ、アメリカでは、アイルランドやスコットランドの移民が、故郷の音楽を伝えてきたという下地があったところが日本と大きく異なる点だ。彼らは依然として出自による多様性を保ったまま、音楽活動を続けている。しかし、1960年末からの『指輪物語』ブームから発した文学におけるケルティック・ファンタジー人気から、やはり同じ時期から始まった「ニューエイジ」音楽の流れが、多様性を意識しないケルト音楽を作り出した（大島1997：127）。ニューエイジの発想は、資本主義・市場主義に翻弄された既存の音楽の対極にある、より自然で、人に優しい音楽をめざすものだった。地球上の全人類にやすらぎを与えるべく創出される音楽は、必然的に無国籍風になった。そこに取り込まれたエンヤは、むしろ露骨にアイルランド的でなかったぶん、都合がよかったのだろう。日本においては、現在でも英国をイングランドと同一視してはばからない人もいるほどである。ケルト系諸地域の出自にこだわらなければならない理由はどこにもない。むしろケルトというおおざっぱなとらえの方が、枠組みとしては手頃だったのだろう。しかしながら、これではいつまでたってもケルト系諸地域それぞれの個性に目が向けられないままである。

(4) 「癒し系」の罪

ヒーリングあるいは癒しという文字を入れると、その商品は確実に売れることから、奇妙な現象がふたつ起こった。まずひとつは、非常に良質で、実質的にも「ケルティック」な音源が、安易に「癒し系」というレッテルを貼られることによって、本質がゆがめられてしまうことである。例えば、スコットランドのレーベル、グリーントラックスの「ケルティック・コレクション」という6枚組のCDは、スコットランドの民謡、ロバート・バーンズのナショナル・ソング、ケイリー・バンドの演奏、バグパイプ、フィドルなどが網羅されている、スコットランド音楽入門に適したシリーズだが、これが日本で発売されるときにうたい文句には、「ヒーリングミュージックの原点。神秘的かつ幻想的な“いのちの歌”ケルト民族音楽」という実に驚くべき表現が用

いられている (http://www.cima-net.co.jp/page/cd2_03.html)。これら6枚のうち、特にケイリー・バンドやバッグパイプなどの音楽は、にぎやかで活気に満ちており、従来の常識的な「癒し」サウンド、すなわち透明感のある落ち着いた清々しい音色からは、まったくかけ離れている。バッグパイプのCDには、勇壮な軍楽隊のレパートリーさえ含まれているというのに、「癒し」とはどういうことだろう。

奇妙な現象の2つ目は、エンヤの音楽のように、本質的にはアイリッシュ/スコティッシュとは言えない音源が、ヒーリング・ミュージックというカテゴリーに入ることによって堂々と「ケルト」と呼ばれ得る傾向である。ヒーリング・ミュージックを専門とする演奏家がアレンジした「ケルト音楽」のCDが、大きな売れ行きを見せている。たとえば、「ケルトの神秘Ⅰ,Ⅱ」というアルバムは、カナダの音楽家ロジャー・カルバリーが、アイルランドのレパートリーをクラシック風にアレンジしたものである。カルバリーは、音楽療法に注目し、自らセミナーを設けてヒーリングと瞑想の指導を行っているのだが、彼の音楽は、ケルトとは名ばかりで実質的には彼自身の作品と考えた方がよいだろう。あまりにも洗練されすぎていて、アイルランド音楽本来の荒削りな優しさからはほど遠いからである。同様のことが、ダニエル・コピアルカによるCD「ケルティック・キルト」や、フィル・コウルターの「郷愁のケルティック・ピアノ」についても言える⁽⁷⁾。

これらは、イージーリスニングにアレンジされたビートルズ同様、本家とは別物と考えるべきであろう。アメリカの評論家、ジョゼフ・ランザが指摘しているように、「ロックの楽曲に対して弦楽オーケストラを用いて原曲からオリジナル性を取り去ると、本物とはあまりにちがうものに仕上がるため、それが新しいリアリティをもつようになる。」(ランザ1997:234) ヒーリング、ニューエイジなどという部門に吸収されたケルトは、それはそれでひとつの価値を持って歩き始める点については、否定するつもりはない。問題は、ケルトというジャンル自体が曖昧である上に、それがヒーリングと結びついてより実態が見極めにくくなったことである。ビートルズの《ヘイ・ジュード》がイージーリスニングに編曲された場合は、お手本としての本家の録音が残っているので、オリジナルにいつでも立ち返ることのできる余裕から、パロディとして笑うこともできるし、BGMとして聞き流すこともできる。しかし、フィル・コウルターの弾く《サリー・ガーデンズ》(アイルランドの声楽曲の中でもっとも有名な曲のひとつ)を聴いても、オリジナルを引き合いに出してバランスを取ることができないのである。なぜなら、伝統音楽の場合には、どれがオリジナルでどれがそうでないかは厳密には言えないからである。伝統音楽が民衆のものである以上、それは絶えず姿を変え、民衆の支持を得たところで「本物」になる。新たな「本物」が、少し前の「本物」を飲み込んでしまい得る。そこが、伝統音楽継承プロセスの難しいところだ。

ケルトのケースで危惧されるのは、「癒し系」という言葉が、容易に思考停止を招くことである。音楽を聴いて癒されるためには、頭を使ってあれこれ考えずに、心身を楽に解き放って音楽

にゆだねることが必要だ。歌詞の内容に立ち入ったり、細かい音使いを分析的に聞き取ったりという、いわゆる集中的聴取とは正反対の位置にある。アイルランド移民のメッセージや、帰らぬ水夫の夫を待つスコットランド女性の悲しみが理解されることなく、我々の癒しのために利用されるとしたらどうであろうか。アイルランドとウェールズでは、歴史も、その音楽性も大きく異なるにもかかわらず、「ケルト」ブランドの下で同一視されるとしたら、日本と中国を同一視する一部の欧米人と同じ過ちを、今度はわれわれが犯すことになる。

むすびに代えて

これまでの「ケルト」受容の流れを振り返ってみると、「魔法」「癒し」「元気」という3つの基本イメージの中で、ケルトはその認知度を高め、受容のされ方も細分化してきたわけだが、音楽のありかたはいささか奇妙である。それは次のように説明できるだろう。まず、エンヤの登場によって生まれた「ケルト音楽」というラベルに、従来のアイリッシュ/スコティッシュ音楽が吸収されて実体不明のジャンルができあがったところに、「癒し系」という救世主が現れて実体が追いついてきた、というわけである。その実体は、アイリッシュ/スコティッシュ音楽が元来持っていた、旋律主体、旋法性、微細な装飾、即興主義といった特色と決別し、テクノロジーを駆使して作り込んだ、いわば「人工的な自然」を獲得して、独自に歩み始めた。いまやそれは、伝統的な音楽を乗り越えてしまいそうである。

問題はたくさんある。まず、「ケルト音楽」が独立したことが公になっておらず、実体不明時代の名残を引きずっていることである。その結果、すべてのアイルランド音楽、すべてのスコットランド音楽、すべてのウェールズ音楽は、疲れた心と体を癒し、元気づけてくれるあの「ケルト音楽」であるという、非常におおざっぱで短絡的な見方から逃れられなくなってしまう。一部のレーベルが、「ケルト」音楽をプロモートするやり方はまさにそうだ。また、「ケルト」というラベルは、多様な実体を見えにくくする。さらに、「癒し系」というフレーズはわれわれの思考を停止させる。「ケルト」というアイデンティティを押しつけられる人たちについて、本当はじゅうぶんに考える必要があるに違いない。

注

- (1) この、ジャンルを超えた癒し用CDの頂点を極めたのが、2000年に東芝EMIより発売されたコンピレーション・アルバム「feel」である。坂本龍一から中国音楽、アイルランドのフィドルまで、幅広いジャンルをカバーしたこのCDは、癒し系では異例の130万枚というセールスを記録した。
- (2) いずれもアイルランドの伝統的な楽器。イリアン・パイプはふいご式で鍵をもつ小型のバグパイプ。フィドルはバイオリン、パウロンは大型の片面太鼓、スプーンは2本のスプーンを接合して打ち合わせて用いる楽器。
- (3) 四ツ谷にはモリガンズ、京都にはザ・ヒル・オブ・タラなどのアイリッシュ・パブがあり、日本のアイリッシュ・バンドによるセッションが活発に行われている。

- (4) ただ、ビートルズのレパートリーの中でケルト性が聞き取れるものは、それほど多くはないと筆者は考える。和久井が例に挙げている《Love me do》冒頭の「ブルーの7度」にしても、アイルランド的とも言えるがそうでないとも言える。つまり、冒頭からブルーの7度を含む2つのコードを振り子のように反復している点はアイルランドらしいが、この旋法的な節回しは、イングランドのチューンにもよくあるパターンであり、全体から醸し出される雰囲気は黒人音楽のそれである。和久井の指摘にはないが、《You've gotta hide your love away》のアイリッシュ・フルートと逆付点は、明確にアイリッシュ/スコティッシュ性を示しているが、ほかの曲にはほとんど見いだせず、ビートルズの楽曲の多くは、むしろイングランドらしさを強く感じる。さらに、和久井はアメリカ音楽のルーツとしてもビートルズの音楽性としても、ケルトの存在をいささか強調しすぎの感がある。
- (5) 長音階の第七音が半音下がった音階。長調に似た響きが得られるが、第七音が半音上がって主音を導く「導音」の働きをしないため、独特の節回しになる。
- (6) ドロレスは、バンド「アルタン」のメンバーである。58ページに引用したアルバムの紹介文は、彼女にしては本意でないはずである。
- (7) コピアルカは現在サンフランシスコ交響楽団の首席第二バイオリニストであり、ヒーリング・ミュージックの作曲家。コウルターはアイルランドのピアニスト・作曲家で、1970年代から自ら率いるオーケストラでヒーリング・ミュージックを提供し続けている人物である。

[引用文献およびケルト関係参考文献]

イエイツ、W .B.

1986 『ケルト幻想物語』井村君江訳、東京：筑摩書房。

1987 『ケルト妖精物語』井村君江訳、東京：筑摩書房。

1993 『ケルトの薄明』井村君江訳、東京：筑摩書房。

井形慶子編

1998 『ケルト入門書』東京：ミスター・パートナー。

石井美樹子

1996 『ありのままのイギリス - 幻のケルトからダイアナ妃まで 不思議な国の魅力と謎』東京：日本文芸社。

井村君江

1983 『ケルトの神話』東京：筑摩書房。

1987 『妖精の国』東京：新書館。

1988 『妖精キャラクター事典』東京：新書館。

1988 『妖精の系譜』東京：新書館。

1989 『フェアリー』東京：新書館。

1992 『アーサー王ロマンズ』東京：筑摩書房。

1995 『ケルト・ファンタジ』東京：あんず堂。

1996a 『ケルト妖精学』東京：講談社。

1996b 『ケルトの妖精』東京：あんず堂。

1997 『コーンウォール・妖精とアーサー王伝説の国』東京：東京書籍。

1998a 『妖精学入門』東京：講談社。

1998b 『妖精の国の扉』東京：大和書房。

2000a 『妖精の輪の中で』東京：筑摩書房。

- 2000b 『妖精とその仲間たち』東京：筑摩書房。
- ウィルコックス、ピーター
2000 『ガリアとブリテンのケルト騎士 - ローマと戦った人々』桑原透訳、東京：新紀元社。
- ヴェスコリー、マイケル
1999 『ケルト 木の占い』豊田治美訳、東京：NTT出版。
- エリュエール、クリスチアーヌ
1994 『ケルト人 蘇るヨーロッパ 幻の民』鶴岡真弓監修、東京：創元社。
- NHK出版編
2000 『フォトドキュメント 歴史の旅人 松本清張のケルト紀行』東京：NHK出版。
- 大島豊
1997 「熱く燃えたぎるケルト圏の音楽 永遠とも言えるその発展と志向性」山尾敦史編『アイリッシュ&ケルティック・ミュージック』東京：東京書籍、126-129。
- 大野光子
1998 『女性たちのアイルランド』東京：平凡社。
- 蒲田東二、鶴岡真弓
2000 『ケルトと日本』角川書店。
- カラン、ボブ
2001 『ケルトの精霊物語』荻野弘巳訳、東京：青土社。
- カンリフ、B.
1998 『図説ケルト文化誌』蔵持不三也訳、東京：原書房。
- ギフォード、ジェーン
2003 『ケルトの木の知恵』井村君江監訳、倉嶋雅人訳、東京：東京書籍。
- グリーン、M.J.
2000 『図説 ドルイド』井村君江監訳、東京：東京書籍。
- クローカー、トーマス・C
2001 『グリムが案内するケルトの妖精たちの世界 上・下』藤川芳朗訳、東京：草思社。
- 小辻梅子
1998 『ケルト的ケルト考』東京：社会思想社。
- サトクリフ、R.
1987 『ともしびをかかげて』猪熊葉子訳、東京：岩波書店。
- ジェイコブズ、J.
1999 『ケルト妖精物語Ⅰ』山本史郎訳、東京：原書房。
1999 『ケルト妖精物語Ⅱ』山本史郎訳、東京：原書房。
- ジェームズ、S.
2000 『図説 ケルト』井村君江監修、吉岡晶子訳、東京：東京書籍。
- シブサワ、コウ編
1996 『爆笑ケルト神話 - 歴史人物笑史』東京：光栄。
- シャーキー、ジョン
1992 『ミステリアス・ケルト - 薄明のヨーロッパ』鶴岡真弓訳、東京：平凡社。
- 高見堅志郎ほか
1993 『アイルランドの奔流 - ケルト民族が残した『幻想と装飾の芸術』は、いま』東京：フジタヴァンテ。

武部好伸

- 1997 『ウィスキーはアイリッシュ』東京：澁交社。
 1998 『ケルト映画紀行』東京：論創社。
 1999 『スコットランド「ケルト」紀行』東京：彩流社。
 2000 『スペイン「ケルト」紀行』東京：彩流社。
 2001 『北アイルランド「ケルト」紀行』東京：彩流社。
 2002 『中央ヨーロッパ「ケルト」紀行』東京：彩流社。

田中仁彦

- 1995 『ケルト神話と中世騎士物語 - 「世界」への旅と冒険』東京：中央公論新社。

田辺保

- 1998 『ケルトの森・プロセリアンド』東京：青土社。

中央大学人文科学研究所編

- 1991 『ケルト 伝統と民俗の想像力』東京：中央大学出版部。
 1996 『ケルト 生と死の変容』東京：中央大学出版部。
 2001 『ケルト復興』東京：中央大学出版部。

ツァイセック、イアン

- 1998 『図説ケルト神話物語』東京：原書房。

辻井喬、鶴岡真弓

- 1994 『ケルトの風に吹かれて』東京：北沢図書出版。

鶴岡真弓

- 1986 『ケルトノ装飾的思考』東京：筑摩書房。
 1993 『聖パトリックの夜 - ケルト航海譚とジョイス変幻』東京：岩波書店。
 1995 『ケルト美術への招待』東京：筑摩書房。
 1997a 『ジョイスとケルト世界』東京：平凡社。
 1997b 『装飾する魂』東京：平凡社。
 1998 『装飾美術・奇想のヨーロッパをゆく - ケルトから日本へ』東京：日本放送協会。
 2001 『ケルト美術』東京：筑摩書房。

鶴岡真弓、松村一男

- 1999 『図説 ケルトの歴史 - 文化・美術・神話をよむ』東京：河出書房新社。

ディレイニー、フランク

- 1993 『ケルト』鶴岡真弓訳、東京：創元社。
 2000 『ケルトの神話・伝説』鶴岡真弓訳、東京：創元社。

ドイル、アーサー、C.

- 1998 『妖精の出現』井村君江訳、東京：あんず堂。

トールキン、J.R.R.

- 1984~86 『指輪物語 1~6』瀬田貞二訳、評論社。
 1993 『指輪物語 1~9』瀬田貞二訳、評論社。

中木康夫

- 1984 『騎士と妖精 - ブルターニュにケルト文明を訪ねて』東京：音楽之友社。

中沢新一、鶴岡真弓、月皮和雄編著

- 1997 『ケルトの宗教 ドルイディズム』東京：岩波書店。

中村とうよう

1996「ケルトとアフリカの“再会”がアメリカ音楽を生んだ」『ミュージック・マガジン』7月号、44-47.

パウエル、T.G.E.

1990『ケルト人の世界』笹田公明訳、東京：東京書籍。

ピゴット、スチュアート

2000『ケルトの賢者「ドルイド」 - 語り継がれる「知」』鶴岡真弓訳、東京：講談社。

ブレギリアン、Y.

1998『ケルト神話の世界』田中仁彦・山邑久仁子訳、東京：中央公論新社。

ヘイウッド、ジョン

2003『ケルト歴史地図』井村君江監訳、倉嶋雅人訳、東京：東京書籍。

ヘルム、G.

1998『ケルト人 [新装版]』関楠生訳、東京：河出書房新社。

堀 淳一

1991a『ケルトの残照』東京：東京書籍。

1991b『ケルト・石の遺跡たち』東京：筑摩書房。

1992『ケルトの島・アイルランド』東京：筑摩書房。

マイヤー、ベルンハルト

2001『ケルト事典』鶴岡真弓監修、東京：創元社。

マクラウド・フィオナ

1991『ケルト民話集』東京：筑摩書房。

松岡利治編訳

1999『ケルトの聖書物語』東京：岩波書店。

マッカーナ、プロインシアス

1991『ケルト神話』松田幸雄訳、青土社。

マックブライド、アングス

2000『ガリアとブリテンのケルト戦士』桑原透訳、新紀元社。

松島駿二郎

2000『ケルト紀行』東京：JTB。

松島まり乃

1999『アイルランド 旅と音楽』東京：晶文社。

マーヴェ、P・ファン・ダー

1999『ポピュラー音楽の基礎理論』中村とうよう訳、東京：ミュージック・マガジン

マルカル、J.

2002『ケルト文化事典』金光仁三郎・渡邊浩司訳、東京：大修館書店。

美月詩織

2001『ケルト妖精占い』東京：イースト・プレス。

『ミュージック・マガジン』

1996「復権するアイルランド音楽」7月号。

村松賢一

1997『ケルトの古歌「ブランの航海」序説』東京：中央大学出版部。

茂木 健

1996「インタビュー ドーラル・ラニー 伝統を前進させ続ける名プロデューサー」『ミュージック・マガジン』7月号、37-39.

山尾敦史編

1997『アイリッシュ&ケルティック・ミュージック』東京：音楽之友社。

山岸伸一

1989「伝統から生まれた新しい音楽 - ケルト系、イタリアなど」『季刊ノイズ』4、65-78.

1997「インタビュー ドロレス・ケーン 農場で歌を覚えたアイルランド最高の女性シンガー」『ミュージック・マガジン』7月号、42-43.

柳宗玄、遠藤紀勝

1994『幻のケルト人 - ヨーロッパ先住民族の神秘と謎』東京：世界思想社。

『ユリイカ』

1991「特集 ケルト 源流のヨーロッパ」3月号。

ランザ、ジョゼフ

1997『エレベーター・ミュージック BGMの歴史』岩本正恵訳、東京：白水社。

ローリング、J.K.

1999『ハリー・ポッターと賢者の石』松岡佑子訳、東京：静山社。

2000『ハリー・ポッターと秘密の部屋』松岡佑子訳、東京：静山社。

2001『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』松岡佑子訳、東京：静山社。

2002『ハリー・ポッターと炎のゴブレット上・下』松岡佑子訳、東京：静山社。

和久井光司

2000『ビートルズ - 20世紀文化としてのロック』東京：講談社。

【引用音源】

ケルツノエンヤ (WEA ミュージック WMC5 561)

ウォーターマークノエンヤ (ダブリューイーエージャパン25P2 2465)

ブラックウォーターノアルタン (東芝 EMI VJCP 25239)

ウィスパー・トゥ・ザ・ワイルド・ウォーターノモイヤ・ブレナン (EPIC レコード EXCA 8102)

honokaノ遊佐未森 (東芝 EMI TOCT 24642)

ユーロ・トラッド・コレクション全15枚 (キングレコード280E52051~65)

ケルティック・コレクション1~6 (英グリーントラックス CDGMP8001~6)

ケルトの神秘 I, IIノロジャー・カルバリー (プレム・プロモーション PRO 8203 8204)

ケルティック・キルトノダニエル・コピアルカ (プレム・プロモーション PRD 8120)

郷愁のケルティック・ピアノノフィル・コウルター (オーマガトキ OMCX 1068)

feel 1~4 (東芝 EMI TOCP 65404 65710 66010 67160)

【「ケルト」関係音源】

ここには、ケルトが癒しと結びついた1997年から現在までの間に日本で発売されたCDのうち、タイトルに「ケルト」と付くもの(記号○)、アイルランドおよびスコットランドの演奏家による演奏が含まれている「癒し系」CD(記号♡)、同様の「元気が出る」CD(記号♣)を中心に掲載する。ごく普通のプロモーションをしているアイルランド、スコットランドのCDは原則として含んでいない。スラッシュ(/)に続いて演奏家名が記され

ていないものは、複数の演奏家によるコンピレーション・アルバムである。

1997年

- ♡オー・マビキノ～レジェンズ・オブ・ザ・ケルトノセレデン (グリーンエナジー GECC 3709)
- ♡ケルティック・トワイライト4：ケルティック・プラネット (グリーンエナジー GECC 3735)
- Celt's women's voice collection (ビクターエンタテインメント VICP 60162)
- ♡ケルトの神秘II / ロジャー・カルバリー (プレム・プロモーション PRO 0204)
- ♡聖なるケルトの子守歌 (フォアレコード FRCP 1024)

1998年

- ケルティック・レイディ (MSI GLCD107)
- ♡オリノコ・フロウ～オーケストラ編曲盤 (東芝 EMITOCIP 50437)
- ♡ケルティック・アルバムノボストン・ポップス・オーケストラ (BMG ジャパン BVCF 1575)
- ♡奏でる風景～ケルトの水にノサミュエル・リード&アーネスト・ライオンズ (東芝 EMI TOCP 50485)
- 恋人たちのケルト紀行～アイルランドに行きたい (ディーポップ DRCC 28006)
- ♡Love, healing & ballads (フォアレコード FRCP 1031)
- ♡ザ・ヒーリング・アンド・ドリーミング・ブルー (フォアレコード FRCP 1032)
- ♡ハーブ&ハンマー・ダルシマーノノーザン・ライツ (ドモレコード DJCP 50029)
- ♡Beyond Titanic / ロン・コーブ (ドモレコード DJCP 50034)
- ♡ケルティック・ラブソディーノシェイマス・ブレット (トリニティー・エンタープライズ DOCDK112)

1999年

- ♡聖なる星の詩～ヒーリング・ヴォイシズ・フロム・ザ・スターズ (フォアレコード FRCP 1034)
- ケルティック・オーラ (トリニティー・エンタープライズ CDTCD X008)
- アイリッシュ・メロディ～ケルトの調べ (キング KICP 677)
- ♠ アイリッシュ・ダンス～ケルトのリズム (キング KICP 676)
- ザ・ベスト・オブ哀愁ケルト (フォアレコード FRCP 1036)
- ケルティック・ヴォヤージュ (フォアレコード FRCP 1035)
- ケルトへの最終超特急 (フォアレコード FRCP 1037)
- ♡ケルティック・トワイライト5 (グリーンエナジー GECH 8014)
- ♠ Music life from the 21st century～ケルトで元気が出る! (フォアレコード FRCP 1038)
- ケルティック・エア2～妖精の王～イニシュフリー・キョール (トリニティー・エンタープライズ TRCD2002)
- ケルティック・ミレニアム・コレクション (トリニティー・エンタープライズ CDIRISH2000)
- ♡Love, healing & ballads 2 (フォアレコード FRCP 1039)
- ♡ケルティック・インスピレーションノシェイマス・ブレット with ケルティック・オーケストラ (トリニティー・エンタープライズ TRCD0115)
- ♡ウイング・オブ・ソングノルース・キャヒル&スザンヌ・ミラー (トリニティー・エンタープライズ TRCD0114)
- ケルティック・ウーマン2 (オーマガトキ OMCX 1043)

2000年

- ケルト (東芝 EMI TOCP 65382)
- ♡ケルティック・ナイト (アイネットシステム NSCD 26892)
- ♠ ケルトで踊ろう! デラックス!～ケルティック・ダンス・デラックス (フォアレコード FRCP 1041)
- ケルティック・ジュエルズノショーン・ケリー・アンサンブル (ブラッツ PLCP 92)
- ケルティック・ウーマン (オーマガトキ OMCX 1051)

- ♡限りなく透明で美しい女性ヴォーカル限定 ケルティック・バラード集 (フォアレコード FRCP 1043)
- ♡ザ・ベスト・オブ・ケルティック・ムード・ミュージック (フォア FRCP 1045)
- アイルランド~聖なるケルトの歌声 (フォア FRCP 1046)
- ♡なんて気持ちいいバグパイプ (フォア FRCP 1047)
- ケルティック・クリスマス (アイネットシステム NSCD 11732)
- ♠リバーダンスのすべてビル・ウィーラン (ユニバーサル・ミュージック UICO 9502~3)
- (リバーダンス関係はほかにも多数)
- 2001年
- モダン・ケルティック・ミュージックの軌跡 (フォア FRCP 1050)
- ♡ANGEL~聖なる天使の詩 (フォア FRCP 1053)
- ♡FAIRY~聖なる風の詩 (フォア FRCP 1052)
- ケルティック・ムード~高地からの風 (ワーナーミュージック WPCR 10975)
- ♡なんて気持ちいいアイルランド (フォア FRCP 1054)
- ♡郷愁のケルティック・ピアノ/フィル・コウルター (オーマガトキ OMCX 1068)
- ♡なんて気持ちいいアコーディオン (フォア FRCP 1055)
- ♠ケルティック・ヒーリング・ファンタジー (フォア FRCP 1056)
- 2002年
- ♡ケルティック・エア・アンド・ダンス (トリニティー・エンタープライズ TRCD0603)
- ハーブが奏でる幻想のケルト・アイリッシュ・ミュージック (キティ MME UMCK 1099)
- ♡レッド・ムーン/シークレット・ガーデン (ユニバーサル・ミュージック UICM 1018)
- ♡郷愁のケルティック・オーボエ/デヴィッド・アグニュー (オーマガトキ OMCX 1078)
- ♠元気をくれるスコットランド! (フォア FRCP 1058)
- ♡銀色の海/メイヴ (オーマガトキ OMCX 1083)
- ♡郷愁のケルティック・ピアノ/フィル・コウルター (オーマガトキ OMCX 1088)